

高岡市埋蔵文化財調査概報第11冊

越中国府関連遺跡調査概報IV

—平成元年度国分寺周辺地区の試掘調査—

1990年3月

高岡市教育委員会

越中国府関連遺跡調査概報IV

—平成元年度国分寺周辺地区の試掘調査—

1990年3月

高岡市教育委員会

序

越中国分寺跡は、高岡市の北側、伏木台地に位置しています。現在、奈良朝の国分寺の法灯を受け継ぐ、国分寺薬師堂があり、この境内地が、県指定史跡越中国分寺跡となっています。ここは、越中一之宮氣多神社へ向かう参道の南側に当たります。また、境内地より南へ通じる小径は、国分寺道と呼ばれる参道でした。

伏木台地は、国分寺跡のほか、越中国府跡の所在地でもあります。国分尼寺跡も近辺に求められており、これらを中心に台地全体を越中国府関連遺跡と捉えています。

本市教育委員会では、この遺跡の解明をめざして、昭和61年度に越中国府関連遺跡調査事業を5箇年計画で始めました。昭和61~63年度の3箇年は、国府跡推定地付近にて実施いたしました。そして、本年度は国分寺跡周辺にて調査することに至りました。

伏木台地の各所における状態と同じく、遺跡の存在状態は良好なものとは言えないものでしたが、今回の調査は、今後国分寺跡を究明していく上で、一つの手掛かりを得たと言えましょう。

今回の調査に当たり、御協力いただきました、坂口幸夫、松谷二郎、立野二朗、栗田喜代治、向一次の各氏、伏木海陸運送株式会社をはじめ、地元の皆様、関係各位に厚くお礼申しあげます。

平成2年3月31日

高岡市教育委員会

教育長 篠 島 满

例　　言

1. 本書は、越中国府関連遺跡に対する試掘調査の概要報告書である。
2. 本調査は、平成元年度国庫補助金の交付を受け、高岡市教育委員会が実施した。
3. 調査地区は、富山県高岡市伏木一宮1丁目・2丁目に所在する。調査期間は、平成元年8月28日から12月5日までである。
4. 本調査は、高岡市教育委員会社会教育課文化係文化財保護主事山口辰一が担当し、社会教育
5. 本調査は、下記の3氏の指導のもとで行った。
古岡英明、市文化財保護審議委員
小島俊彰、市文化財保護審議委員
(金沢市立美術工芸大学助教授)
西井龍儀、富山考古学会会員
<順不同、敬称略>
6. 国面の方位は真北(座標北)である。
7. 本書の執筆は、山口が担当した。

越中国府関連遺跡調査概報IV

目 次

序

例言

目次

I 序 説	1
II 向一次地区	7
1. 概 况	7
2. 遺 構	9
3. 遺 物	10
III その他の地区	12
1. 板口幸夫地区	12
2. 松谷二郎地区	12
3. 立野二朗地区	12
4. 栗田喜代治地区	13
5. 旧伏木海員会館地区	14
IV 結 語	15

図面目次

図面1 遺物実測図 向一次地区 (土器)	図面5 遺物実測図 向一次地区 (瓦)
図面2 遺物実測図 向一次地区 (土器)	図面6 遺物実測図 向一次地区 (瓦他)
図面3 遺物実測図 向一次地区 (土器)	図面7 遺物実測図 向一次地区 (土製品)
図面4 遺物実測図 向一次地区 (土器)	図面8 遺物実測図 立野二郎地区 (土器)

図版目次

図版1 遺構 向一次地区	図版7 遺構 菓田古代治地区
1. 全景 (北)	1. 全景 (南)
2. 全景 (東)	2. 全景 (北)
図版2 遺構 向一次地区	図版8 遺構 海員会館地区
1. S D01・02全景 (東)	1. 南西側近景 (北東)
2. S D01・02全景 (西)	2. 北西側近景 (南東)
図版3 遺構 向一次地区	図版9 遺物 向一次地区
1. S D05~07全景 (北)	1. 中世土器
2. S D05~07全景 (南)	2. 珠洲
図版4 遺構 板口幸夫地区	図版10 遺物 向一次地区
1. 全景 (東)	1. 丸瓦・平瓦, 凹面
2. 全景 (西)	2. 丸瓦・平瓦, 凸面
図版5 遺構 松谷二郎地区	図版11 遺物 向一次地区
1. 全景 (南東)	1. 平瓦, 凹面
2. 全景 (北東)	2. 平瓦, 凸面
図版6 遺構 立野二郎地区	図版12 遺物 向一次地区
1. 全景 (南)	1. ヘラ描き土器
2. 南側近景 (北)	2. 軒平瓦
	3. 土縫

挿図目次

第1図 遺跡位置図(1/5万)	1	第5図 向一次地区遺構図(1/200)	8
第2図 越中府間連遺跡位置図(1/1万5千).....	2	第6図 立野二郎地区全体図(1/400)	13
第3図 国分寺周辺地区位置図(1/5,000)	4	第7図 海員会館地区トレンド配置図(1/800)	14
第4図 調査地区位置図(1/5,000)	6		

I 序 説

遺跡概観

高岡市街地の北約3kmの地点に二上の山塊が存在する。この山塊を取り巻くように段丘が発達している。この中の一つが越中国府関連遺跡を載せる伏木台地である。伏木台地は二上山塊の東麓、小矢部川の河口左岸に位置し、上下2つの段丘より成り立っている。

越中国府関連遺跡は、伏木台地全体、すなわち南北2.15km、東西1.75kmを計るものである。越



第1図 遺跡位置図 (1/5万)



第2図 越中国府間連遺跡位置図 (1/1万5千)

a - 越中国府跡推定地, b - 越中国分寺寺域想定地, c - 御亭角遺跡, d - 越中一之宮氣多神社

中国庁跡、越中国分寺跡を中心として、これと関連する施設も含めて、越中国府関連遺跡と総称している。

伏木台地の内、上位の段丘は標高50~89mを計り、西側に位置する。この段丘の北端部に越中・之宮氣多神社が位置する。下位の段丘は上位の段丘の東側に拡がるものである。この段丘は標高14~16mを計り、浸食谷によって、北・中央・南の3つの台地に区分される。北部の台地には越中国分寺跡が位置する。中央の台地には、淨土真宗本願寺派の大寺院「勝興寺」があり、この境内地が越中国庁跡の推定地となっている。

越中国分寺跡

越中国分寺跡（国分僧寺）は、高岡市伏木一宮字国分堂とその付近に比定されている。字国分堂807番地には薬師堂と呼ばれる堂宇がある。現在、真言宗の寺となっている国分寺である。この薬師堂のある境内地約1,538m²が越中国分寺跡として県の指定史跡になっている。

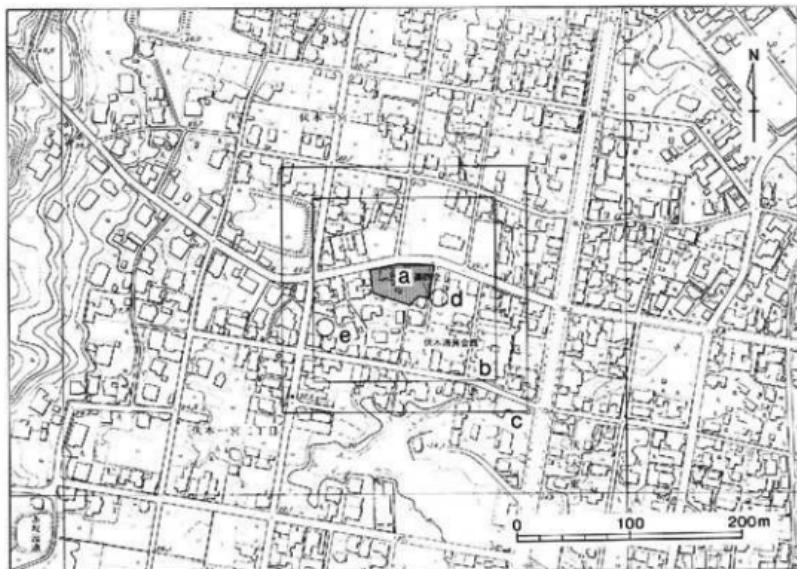
越中国分寺について、実地に即しての具体的研究は、県内在住の国分寺研究家であった堀井三友氏のものが最初である。昭和11年の11月と12月、堀井氏は文部省の上田三平氏と共に、境内地の南東方の畑地と南西方の谷部崩面の発掘調査を行った。この調査で、軒丸瓦・軒平瓦等の出土をみた。翌昭和12年にも上田氏らとの実地調査が行われた。

この発掘調査や他の現地における知見も含めて、堀井氏の見解はいくつかの論攻となって公表された（堀井1937・1938・1956）。堀井氏は、それまでの越中国分寺の位置に関する諸説、国分寺海岸説（伏木国分の海岸）や国分寺海中説（現在の海中にかつて存在）を退け、現在の国分堂付近説を採られた。堀井氏は境内に残る土壇を金堂基壇の名残りとされ、これを中心に寺域も推定された。

昭和41年に、上記の土壇の発掘調査が行われた。これは富山県教育委員会・富山考古学会会員を中心とした調査団によるものである。この結果、土壇が版築の技法によりなされていること、礎石の根石が3m間隔で6箇所存在することを確認すると共に、従前より知られていたものと同様な瓦の出土もみた。ただ瓦の出土状況から、この土壇は2次の構築物と考えられた。第3図に示した国分寺跡の範囲等はこの発掘調査の報文に基づいている（淡他1967）。

伏木台地での基礎資料の収集に当たると共に研究を進めていた古岡英明氏は、昭和26年に伏木台地で唯一白鳳時代の瓦を出土する御亭角遺跡の問題を提示された（古岡1951）。さらに昭和31年には国分寺跡のことも含めて、伏木台地の古代遺跡についての見解を総括された（古岡1956）。その後も国分寺をめぐっていくつかの論攻を公表されている（古岡1983・1985・1987）。古岡氏は、御亭角遺跡を庵寺跡（御亭角庵寺）と位置付け、その史的性質を積極的に論じられている。

御亭角遺跡は、越中国庁跡推定地である勝興寺境内の南側一帯に位置する。字は御亭角・美野下である。ここからは白鳳時代前期頃の瓦と越中国分寺期瓦とも称される奈良時代後半頃の瓦が出土している。後者は越中国分寺跡を始め、伏木台地の各所から出土する。前者は御亭角遺跡のみである。これをめぐっては、地方における最初期の寺院造営、その立地からする国庁付属寺院



第3図 国分寺周辺地区位置図 (1/5,000)

a - 県指定史跡国分寺跡, b - 伽藍地想定線, c - 寺城想定線,
 d - 昭和11年11月発掘地点, e - 昭和11年12月発掘地点

の問題と結び付く。またこの遺跡から奈良時代後半頃の瓦が出土することは、国分寺造営の問題にも繋がって行く。

越中国分寺の造営時期を究明する上で『万葉集』卷17~19に収載されている天平18年から天平勝宝2年までの歌は、貴重な史料となっている。大伴家持が国守として越中に在任中の歌日記とされるこれらの中に、僧玄勝、先の国師の從僧清見、講師僧惠行、寺井の語がある。このことより、すでに越中国分寺が存在したとする考えが一般的であった（和田1959ほか）。これに対して古岡氏は、①家持が『万葉集』で国分寺のことを記していないことから国分寺が未完成であった可能性がある。②『万葉集』にみえる僧玄勝等の語は、直接国分寺の存在を根拠付ける史料とは言えない、むしろ、御亭角廻寺における仏教的諸活動を表した可能性が強い。③このことから、御亭角廻寺が国分寺の代替機能を果たしていたとされた。

越中国分寺の瓦については、古くは長島勝正氏のものがある（長島1937）。また堀井氏も瓦の内容を報ずると共に、その軒平瓦が三河国分二寺のものと類似していることをすでに指摘されている（堀井1938）。

近年に至り、森郁夫氏は、平城宮系軒瓦の地方における所用について、政府による国分寺造営事業の推進の影響を見て取る中で、越中国分寺軒丸瓦を伯耆国分寺系瓦と位置付けられた。そして、この系統の瓦も平城宮系軒瓦と同様な史的背景を有するとされた（森1974）。この点について、吉岡康暢氏は、越中国分寺の軒瓦が直接的に平城宮所用軒瓦と結び付くと解釈された。さらに、三河国分二寺の軒瓦との酷似より、その背後における中央からの一元的な系譜を想定されている。

御亭角式とされる軒丸瓦も含む白鳳時代前期頃の瓦については、その生産地の一つが、小杉町の丸山遺跡であることが西井龍儀氏によって発明された（西井1983）。この遺跡は越中国府関連遺跡と同じく古代の射水郡に所属する。しかし越中国分寺の瓦の生産地は現在のところ、不明である。西井氏は越中国分寺の瓦の研究も進められており、その成果の一端は『北陸の古代寺院』で知ることができる。

上述の造営時期や瓦の文様・技法の系譜の問題は、大伴家持が越中へ派遣されたことに象徴される中央政府の方針とも結び付き、また在地における郡司層の動向とも結びつく。越中国分寺をめぐる諸問題も、これらについて多くの興味ある観点が論じられている。

発掘調査の方は、ほとんど進展しないまま今回の調査を迎えたが、ここ数年の間に2箇所で小規模な発掘を高岡市教育委員会が実施した。昭和61年に史跡国分寺跡の道路を隔てた北接地で宅地造成に伴う調査を行ったが、削平のため成果を得なかつた。また昭和62年に史跡国分寺跡の東側約100mの地区で住宅建築に伴う調査を行つた。この時は、溝等が検出され、奈良・平安時代の土器が出上した（高岡市教育委員会『越中国府関連遺跡調査概報』Ⅱ）。

越中国分尼寺跡

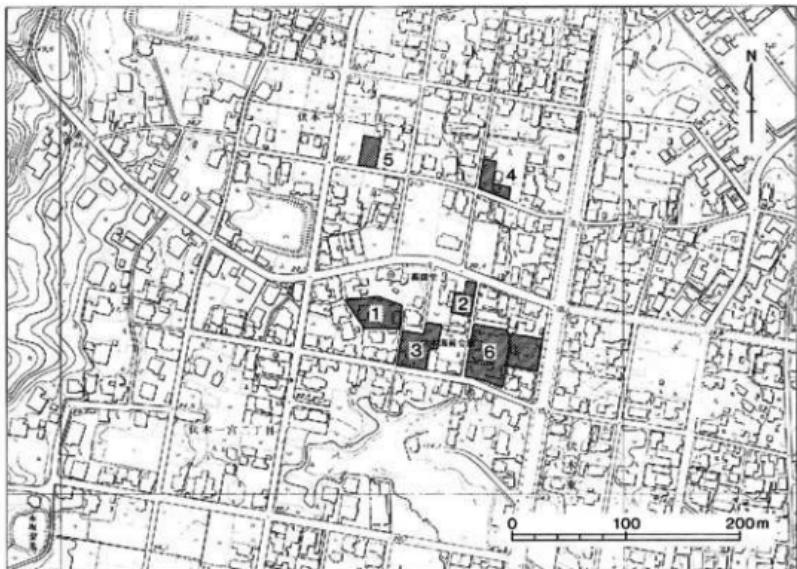
国分尼寺は言うまでもなく正式には「法華滅罪之寺」である。越中国分尼寺の研究は、この法華（花）と言う言葉に注目して進められた。

国分尼寺跡の所在地について、滑川市北加賀字法花寺説や旧中新川郡三郷村高堂説は根拠も弱く、すでに否定されている。また御亭角遺跡説もあったと言うが、論議に上がっていない。

『正倉院文書』天平宝字3年（759）11月14日付「越中国諸郡庄園物券第1」の中に「鹿田村地—北法花寺溝」の名前がある。これを角田文衛氏（角田1938）や堀井氏（堀井1956）は越中国分尼寺の存在を示すものとされた。和田一郎氏は、この「法華寺溝」の存在と鹿田荘の比定より、現在も高岡市野村に所在する蓮華寺を国分尼寺跡に当てる説を提唱された（和田1959）。

この法華寺については、井上薰氏が越中国分尼寺を示すのかどうか明らかでないとされ（井上1966）、さらに藤井一二氏が、大和法華寺に関する史料であることを論証された。また、長島勝正氏は、他の観点も含めて、蓮華寺=国分尼寺跡説を否定された（長島1976）。

諸国の国分尼寺跡の実例から考えて、国庁や国分寺の周辺に所在したとするのが基準と言える。この点では、古岡氏がすでに伏木台地の瓦出土遺跡を国分尼寺跡の候補地とされているのをはじめ、同様の見解もいくつかあり（京田1972、長島1976）、この考えが一般的と言えよう。



第4図 調査地区位置図 (1/5,000)

1—坂口幸夫地区, 2—松谷二郎地区, 3—立野二朗地区
4—栗田喜代治地区, 5—向一次地区, 6—海員会館地区

今回の発掘調査

越中国府関連遺跡の試掘調査は、昭和61年度から5箇年計画で実施しており、今年度はその第4年に当たる。今回は越中国分寺跡周辺にて調査を行った。調査地区は以下の6箇所である。

1. 坂口幸夫地区, 調査対象地面積 1,179m², 発掘調査面積 19.3m², 地区記号 F14
2. 松谷二郎地区, 調査対象地面積 165m², 発掘調査面積 36.6m², 地区記号 F15
3. 立野二朗地区, 調査対象地面積 948m², 発掘調査面積 71.6m², 地区記号 F16
4. 栗田喜代治地区, 調査対象地面積 386m², 発掘調査面積 13.3m², 地区記号 F17
5. 向一次地区, 調査対象地面積 290m², 発掘調査面積 155.3m², 地区記号 F18
6. 海員会館地区, 調査対象地面積 3,032m², 発掘調査面積 277.2m², 地区記号 F19

6地区合計の調査対象面積は6,000m²である。また発掘調査面積は573.3m²となった。

調査地区名はその土地の所有者の氏名を使用した。ただし、旧伏木海員会館地区（海員会館地区と略称）は、伏木海陸運送株式会社の所有地ではあるが、便宜を考えてこのように呼称することにした。御了承いただきたい。

II 向一次地区

1. 概況

調査対象地は、伏木一宮2丁目526に所在する。県指定史跡越中国分寺跡の北側約100mの地点に位置する。水田の中の一角で、標高約22mを計る平坦地である。周囲は宅地化が進んでいる。当地区付近は宇大門であり、南側は宇一過寺である。当地区の北側一帯が大門遺跡と称されている所で、この遺跡からは昭和11年に、越中国分寺所用の軒丸瓦としては、最も完形に近いものが出土している。

当地区は、290m²の面積を有する。今回発掘調査したのはこの内155.3m²である。当初2×2mのトレンチを、北側において2箇所設定して掘り下げた。約30cmの表土（耕作土）の下は、基盤層下部の砂礫層で、基盤層上部の黄褐色粘土層は存在しなかった。また遺物も殆ど出土せず、遺構が存在しない地区と推定された。引き続いて南側にも2×2mのトレンチを…箇所設定して掘り始めた。ここでも北側のトレンチ同様、表土の下は基盤層下部の砂礫層となり、基盤層上部の黄褐色粘土層は存在しなかった。しかし、トレンチの間に砂礫層を切り込む形で、遺構状の落ち込みが確認されると共に、遺物の出土をみた。そこで、ここを手掛かりとして、順次北側へ掘り拡げて行った。遺構の拡がりを追究して行き、最終的には排土置き場とした北側約3分の1以外の発掘可能な全域を掘り拡げる結果となった。なお、基盤層は吸水性が悪く、雨の度に調査地区は冠水した。このため発掘区の周囲に小溝を穿って、排水の用とした。その一方、粘土質のため晴天の時はひび割れが生じ、散水を行った。

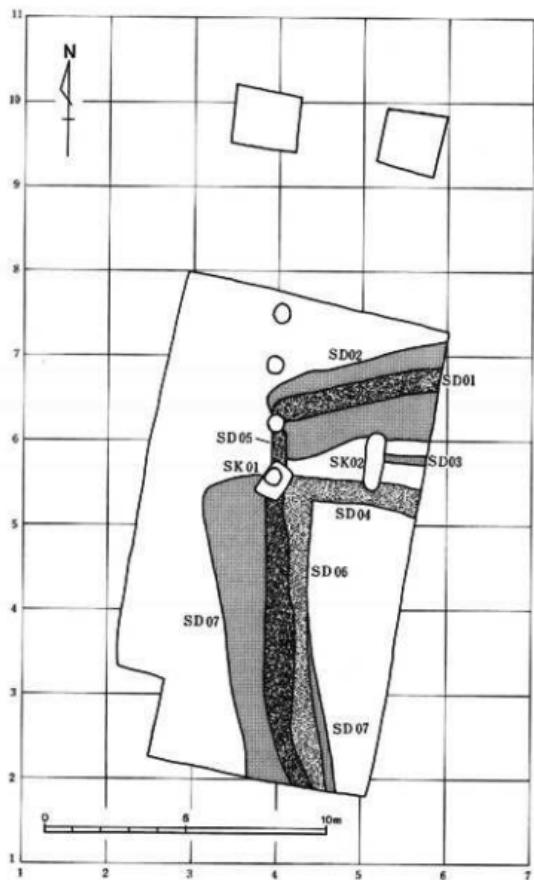
上述のように、伏木台地において遺構を載せる基盤である黄褐色粘土層が存在しなかったが、砂礫層を掘り込む形で遺構が検出された。これは、遺構の上部はすでに削平されて下部のみ残存していることを意味している。

遺構は部分的に掘り下げた。遺構実測図は第5図として示したが、煩雑になるので省略した部分がある。SKは土坑を、SDは溝を表す記号である。スクリーントーンを貼った部分は溝である。方眼は3m四方の一つのグリッドを示し、東西をX軸、南北をY軸とする。平面直角座標系の原点（北緯36° 00' 00"、東経 137° 10' 00"）より、X=1、Y=1の地点は、西へ10,233m、北へ88,287m向かった位置である。

検出された遺構は、土坑2基（SK01・02）、溝7条（SD01～07）である。この他にピットや礫群、礫が検出された。

遺構、特に溝は錯綜していた。それぞれの溝の範囲確定や新旧関係については、土層断面の観察を主に判断の基準とした。

出土遺物、特に土器類は、奈良時代～平安時代中期頃の一群と室町時代頃の一群とに大別され



第5図 向一次地区遺構図 (1/200)

る。これ以外の時代に該当する土器類は究めて少ない。このことより遺構もこの2時期に大きく区分されるものと判断した。奈良時代～平安時代中期頃の遺構は、SD02・03・07である。室町時代頃の遺構は、SK01・02、SD01・04～06である。ピットも同様であろう。礫群については、その中に中世の土器類を含んでいるものがいくつか認められたので、また室町時代頃とした溝に伴うものが多いことから、この時期のものと推断した。

遺物では土器類の出土が多い。前述のように2時期に区分されるが、奈良時代～平安時代中期

頃に所属するものが多い。また、今回土縫の出土が目立っている。これのみでは時期の比定が困難なもの一つである。これについては、土器類の年代観より、奈良時代～平安時代中期頃のものである可能性がある。

2. 遺構

土坑

SK01 不整橢円形の土坑。規模は長軸125×短軸95cm、深さ7cmを計る。SD04～07を切っている。また、ピットに切られている。

SK02 長橢円形の土坑。規模は長軸205×短軸65cm、深さ6cmを計る。SD02～04を切っている。

溝

SD01 東西に走る溝。規模は幅80～90cm、深さ25cmを計り、6.1mにわたって検出された。東側は調査地区外となる。SD02と重複し、これを切っている。また、ピットに一部切られている。疊群や疊が多く含まれている溝である。

SD02 東西に走る溝。規模は幅260～340cm、深さ18cmを計り、6.2mにわたって検出された。東側は調査地区外となる。SD01と重複し、これに切られている。また、SK02、SD05、に一部切られている。

SD03 東西に走る溝。規模は幅30～35cm、深さ4cmを計り、1.4mにわたって検出された。東側は調査地区外となり、西側はSK02に切られて終わる。

SD04 東西に走る溝。規模は幅90～100cm、深さ14cmを計り、4.8mにわたって検出された。東側は調査地区外となり、西側はSK02に切られている。また、SK02に一部切られている。遺構名は別にしたが、南側へ折れ曲がってSD06に繋がる可能性が強い。

SD05 南北に走る溝。規模は幅50～110cm、深さ28cmを計り、12.7mにわたって検出された。南側は調査地区外となる。SD06・07と重複し、これらを切っている。また、SK01に切られ、SD02を切っている。南側を中心に疊群・疊が多く含まれていた。

SD06 南北に走る溝。規模は幅90cm以上、深さ30cmを計り、11.1mにわたって検出された。南側は調査地区外となる。SD05・07と重複し、SD05に切られ、SD07を切っている。また、SK01に一部切られている。遺構名は別にしたが、東側へ折れ曲がってSD04に繋がる可能性が強い。

SD07 南北に走る溝。規模は幅300～310cm、深さ14cmを計り、11.0mにわたって検出された。南側は調査地区外となる。SD05・06と重複し、これらに切られている。またSK01に一部切られている。

3. 遺物

遺物の出土位置

遺物の内、遺構掘り下げ時に出土し、その位置が明確なものは、以下の通りである。

S D01 : 須恵器162, 珠洲221, 瓦312

S D02 : 須恵器118. 142, 土鍤403

S D04 : 須恵器148. 150

S D05 : 須恵器129. 138. 176, 中世土師器201. 203~206. 208. 211, 珠洲213. 217. 220, 瓦315,
土鍤404. 411. 414, 砧石501

S D06 : 須恵器146. 166. 174, 中世土師器202, 瓦311. 316

S D07 : 須恵器114. 115. 122. 130. 132. 147. 151. 172, 瓦302. 303. 307. 309. 321, 土鍤407

土器類 1. 古代

奈良・平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器である。土師器は細片のみで図示し得なかった。
須恵器・灰釉陶器は図面1~4で示した。

須恵器 図面1~4の101~176である。以下器種ごとに若干述べてみる。

杯A 高台の付かない杯で101~110である。底部はヘラ切りのままとなっている。底部中央
にナデが認められるのは、104~106である。

杯B 高台付の杯で111~114である。底部はヘラ切りのままとなっている。ただし135は系
切りである。底部中央にナデが認められるのは、114. 116. 118. 125. 127. 131. 138. 142.
143である。

稜碗 外面に稜が付き口縁部が外反する。145の1点である。

皿 慢く外反気味に拡がるもの。146の1点である。

蓋 杯類の蓋で147~169である。全体の形態が判明するものはない。つまみは偏平な宝珠形
のものである。口縁部は下方へ短く折れ曲がるものである。天井部内面にナデが認められ
るのは、151. 152. 154. 162である。

壺 壺・瓶類の破片で、170~173である。170は双耳壺の耳部を中心とした破片で、図のよ
うに耳部が垂れ下がり下端部に透し孔が付く形態とした。

甕 甕の口縁部片で174~176である。

灰釉陶器

皿 皿の口縁下部片177である。漬け掛けと考えられる軸が付いている。

壺 壺・瓶類の頸部片178である。

土器類 2. 中世

室町時代頃の中世土師器と珠洲である。前者は瓦質土器も含めている。いづれも小破片である
ので、実測図は省略し写真(図版9)でのみ示した。

中世土師器 図版9-1の201~211である。

擂鉢 土師質及び瓦質の擂鉢で201~206である。201.202が瓦質となる。すべてにオロシ目が付く。

火鉢(火桶) 瓦質の火鉢で207~211である。207.208が口縁部片で209~211が底部片である。

珠洲 図版9-2の212~222である。

擂鉢 212~214である。212.213は口端面に波状文が付く。

壺 215の1点である。

甕 216~222である。

瓦

軒平瓦 越中国分寺所用の軒平瓦は、T字形中心飾を有する均整唐草文軒平瓦の一種類のみ知られている。図示した301(図面6、図版12-2)も同様なものである。これ以外に文様不明の軒平瓦の小破片が1点出土している。

丸瓦 磨滅していて残存状態が悪いので、写真(図版10)でのみ示した。302.303である。奈良時代後半頃の越中国分寺期瓦とされているものである。

平瓦 丸瓦同様、越中国分寺期瓦である。図版10の304~311と図版11の312~322である。図版10で示した方は、残存状態が悪いので拓影図を省略した。図版11で示した方は図面5の拓影図も参照されたい。これらの瓦は、凹面が布目、凸面が繩目となるものである。

土製品

ヘラ描き土器 401(図面6、図版12-1)である。須恵器の壺類の胴部片内面に、ヘラ描きによる文字「丸」がみえる。

土鍤 土師質柱状の土鍤である。図示したのは402~416の15点(図面7、図版12-3)であるが、これ以外に小破片が15点出土した。図示したものの法量等は以下の通りである。

402 ; 長さ5.5.径3.8, 孔径1.8, cm,	410 ; 長さ4.8, 径4.4, 孔径2.0, cm
403 ; 長さ5.3, 径4.9, 孔径2.0, cm,	411 ; 長さ4.5, 径4.3, 孔径1.9, cm
404 ; 長さ5.0, 径4.6, 孔径2.0, cm,	412 ; 長さ4.6, 径3.8, 孔径1.7, cm
405 ; 長さ4.9, 径4.9, 孔径1.9, cm,	413 ; 長さ4.2, 径3.6, 孔径1.6, cm
406 ; 長さ4.9, 径4.6, 孔径1.8, cm,	414 ; 長さ4.3, 径4.1, 孔径1.9, cm
407 ; 長さ5.0, 径4.6, 孔径2.1, cm,	415 ; 長さ4.4, 径4.6, 孔径2.2, cm
408 ; 長さ4.7, 径4.9, 孔径1.8, cm,	416 ; 長さ4.3, 径4.4, 孔径2.0, cm
409 ; 長さ4.9, 径4.6, 孔径1.9, cm	

石製品

砥石 501(図面6)である。現存長11.6, 幅4.8, 厚さ1.7cm。一方の端部を欠損。長側面の大きい1面が整形面、他の3面が使用面。

III その他の地区

1. 坂口幸夫地区

調査対象地は、伏木一宮1丁目601に所在する。史跡国分寺跡に南接する地区的西側である。民家の敷地の一角を試掘した。標高21mを計る平坦地である。当地区は、1,179m²の面積を有する。今回発掘調査したのはこの内19.3m²である。幅2m×長さ8mのトレンチを東西に一条設定した。約15cmの表土層の下は、黄褐色粘土の基盤層であった。遺構は確認されなかった。遺物は土師器の細片が少量出土したのみである。

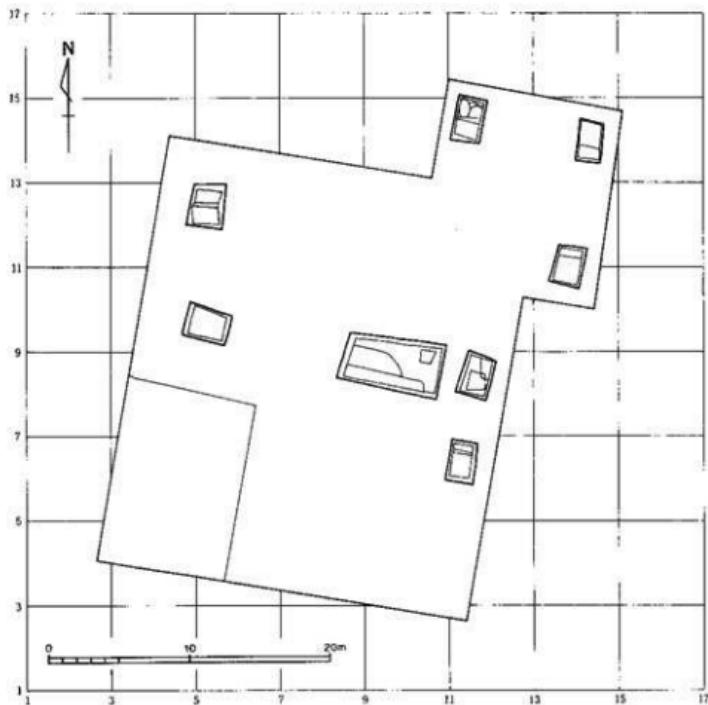
2. 松谷二郎地区

調査対象地は、伏木一宮1丁目584-1に所在する。史跡国分寺跡の東側約50mの地点に位置する。住宅に囲まれた空き地を試掘した。標高約20mを計る平坦地である。当地区は、165m²の面積を有する。今回発掘調査したのはこの内36.6m²である。トレンチは調査地区の北側と南側に各1箇所設定した。北側は幅1.5m×長さ5mの東西トレンチ、南側は幅2~3m×長さ12.5mの東西トレンチである。黄褐色粘土の基盤層は、南側トレンチの南端部で僅かに認められたに過ぎない。他は、大きく削平を受けていた。遺物は、土師器等の細片が少量出土したのみである。

3. 立野二朗地区

調査対象地は、伏木一宮1丁目592、593に所在する。史跡国分寺跡の南側約50mの地点に位置する。住宅に囲まれた造成地であるが、現在は新地となっている所である。標高約20mの平坦地である。当地区は、948m²の面積を有する。今回発掘調査したのはこの内71.6m²である。トレンチは、当初幅2m×長さ3mほどのものを7箇所設定した。その後、幅4m×長さ7mのやや大型のものを設定した。層位は上から順に、1-盛土、2-旧表土、3-2次堆積の粘質土、4-基盤の砂礫層となった。すなわち、黄褐色粘土層はなく、遺構は存在しなかった。なお、第6回のX=1、Y=1の座標は、原点から10.206mと88.104mの地点である。

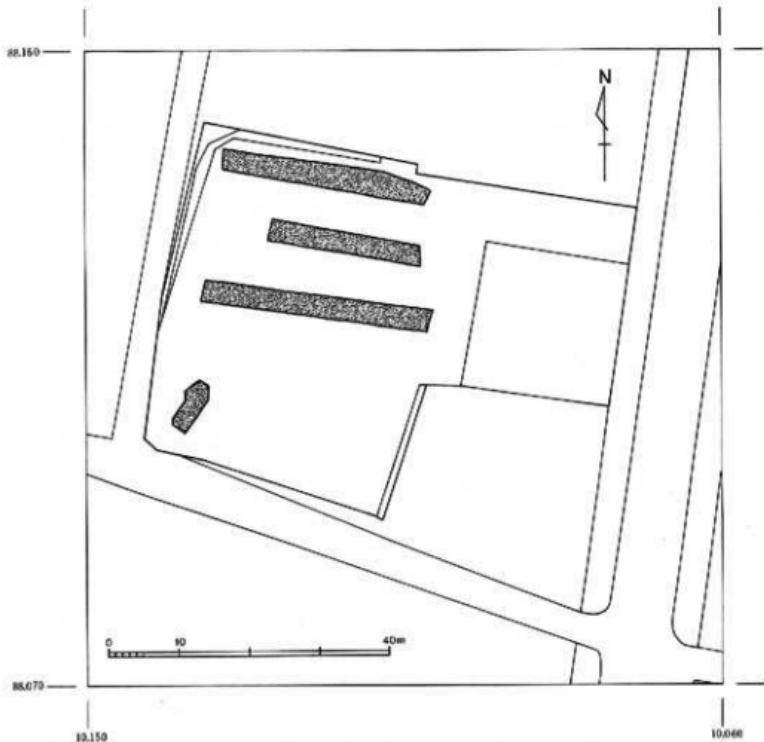
遺物を図面8で示した。主に2次堆積の粘質土から出土した土器である。601~620は土師器である。杯・碗類；601~609、底部は糸切り、柱状高台の皿；610~620、620のみ中空となる。621、622は須恵器の杯である。623は珠洲の擂鉢である。



第6図 立野二郎地区全体図 (1/400)

4. 蓬田喜代治地区

調査対象地は、伏木一宮2丁目484-1.485-1に所在する。史跡圓分寺跡の北東側約100mの地点に位置する。住宅に囲まれた造成地であるが、現在は畠地となっている所である。標高19~20mを計り、北へ向かって下って行く傾斜地である。北東から支谷が入っており、当地区の北側は支谷に臨む崖際となっている。当地区は、386m²の面積を有する。今回発掘調査したのはこの内13.3m²である。トレンチは南側に1箇所設定した。幅2m×長さ7mで南北に入れた。層位は、第1層；表土、33cm、第2層；灰色粘質土層、12cm、第3層；灰褐色粘質土層、25cm、第4層；基盤層下部の砂礫層であった。第2層は造成土であり、第3層も2次堆積上であった。遺物は殆どなく、近世の伊万里系磁器の皿が目立つ程度であった。



第7図 海員会館地区トレンチ配置図 (1/800)

5. 旧伏木海員会館地区

調査対象地は、伏木一宮1丁目577に所在する。史跡国分寺跡の東南東側約100mの地点に位置する。最近まで伏木海員会館の建物が建っていた所である。標高約20mの平坦地である。当地区の調査対象面積は、3,032m²である。発掘調査面積は、277.2m²となった。トレンチは、第7図のように配置した。すなわち、幅2mの長大なものを3条東西に設定した。それと南北隅部にやや小さいトレンチを設定した。建物の跡地もあり、コンクリートの基礎があり、また削平を受けている部分が殆どを占め、遺構は検出されなかった。遺物は、珠洲の甕片が1点と土師器の細片が少量出土したのみである。

IV 結 語

高岡市教育委員会による越中国府関連遺跡の調査は、国序跡推定地である勝興寺付近で主に行ってきた。今回はここを離れ、国序跡推定地の北北東約600mに位置する、県指定史跡越中国分寺跡周辺地区で実施した。国分寺跡周辺地区も当初より調査予定地に入っていた。

今回の調査は、6箇所の調査地区を設定して行った。この内5箇所は搅乱等のため、成果を上げるに至らなかった。伏木台地は、近代の瓦粘土採取による掘削を受けており、これらのため、遺跡の状態は良好ではないが、新ためてこの事実を認識した。

遺構が検出された向一次地区は、国分寺跡の北側に当たる。土坑と溝が確認された。時期は、奈良時代～平安時代中期頃と室町時代頃に大きく区分される。前者は当然国分寺と関連付けてよいであろう。性格等については、論じることができる段階ではない。

向一次地区的遺構は、上部が削平され下部のみ検出されたものである。瓦粘土採取による削除であることは確実と思われる。この周辺ではこの程度にしか遺構が存在していないとも言える。しかし、瓦粘土採取による削平を受けていても、遺構が存在していることを証明したとも言えよう。この意味では大きい成果であったとの評価もなされよう。

先に簡単に振り返ったように、越中国分寺跡の調査研究は、精魂を傾けた堀井三友氏の研究が基礎となり、その後、活用できる現存資料をすべて使って、展開してきた。考古学的には、発掘調査が小規模なものに止まり、前へ進むためには、本格的な調査が望まれる段階である。

付記

伏木台地全体を越中国府関連遺跡と捉える考えに変更はないが、その範囲を示す数値を若干変更して、南北2.15km、東西1.75kmとした。この方がより正しいと判断したためである。

総称的遺跡名の越中国府関連遺跡、並びに御亭角遺跡等個別の遺跡名を併用している。後者は、前者の中の一つの地区に該当するが、個別の遺跡名は、研究史を通じて確立しているものであり、個々の性格を論じる場合便宜である。また、人口に體炎しており、従前と同じく使用している。ただし、行文上「御亭角地区」等のように記す場合がある。総称的遺跡名は、遺跡を構造的に把握する上に必要と考えている。

参考文献

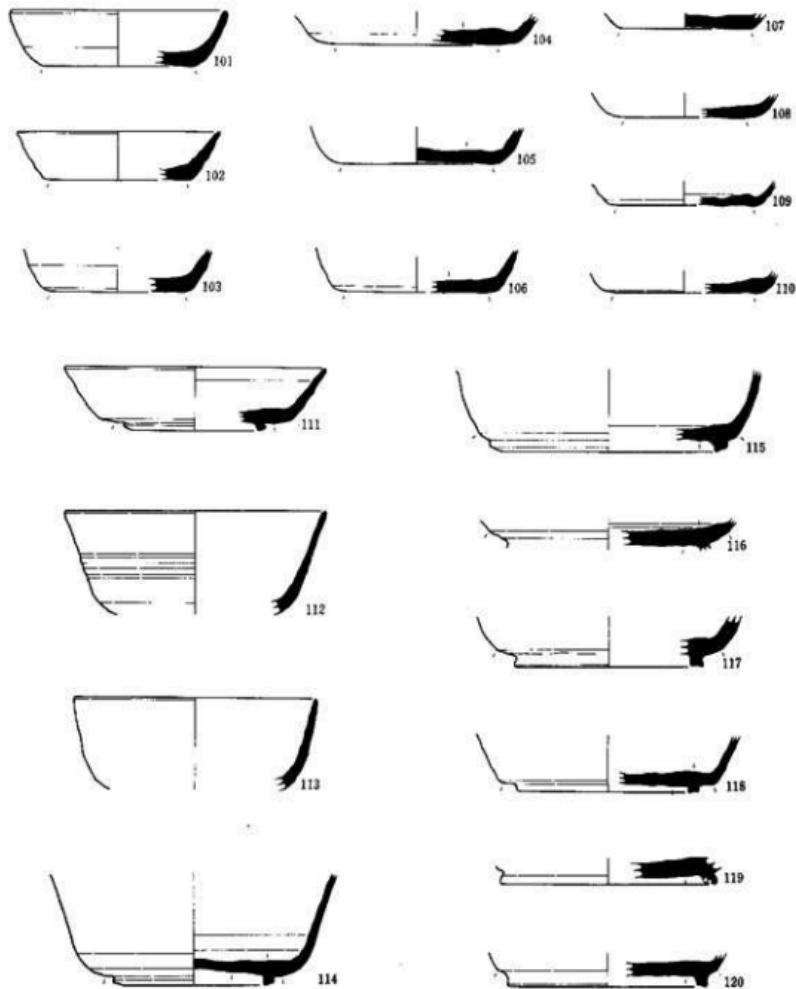
- 長島勝正 1937 「越中国分寺跡発見古瓦」『考古学雑誌』第27巻第4号 考古学会
- 堀井三友 1937 「越中国分寺跡」『史迹と美術』第80号 史迹美術同弦会
- 角田文衛 1938 「国分寺の設置」『国分寺の研究』上巻 考古学研究会
- 堀井三友 1938 「越中国分寺」『国分寺の研究』下巻 考古学研究会
- 古岡英明 1951 「越中国分寺創設に関する考察」『研友会誌』第6号 富山大学科学教育研究室
- 古岡英明 1956 「昔の伏木」『学習資料 - 伏木の文化』 伏木小学校
- 堀井三友 1956 『国分寺跡之研究』(堀井三友著刊行委員会編) 中沢印刷
- 和田一郎 1959 『高岡市史』上巻 (高岡市史編纂委員会編) 青林書院新社
- 井上 純 1966 『奈良朝仏教史の研究』 吉川弘文館
- 渥 段他 1967 『越中国分寺とその周辺の遺跡調査報告書』(越中国分寺とその周辺の遺跡調査団編) 富山県教育委員会
- 京田良志 1972 「寺跡・経塚・磨崖仏・建物跡など」『富山県史』考古編 富山県
- 藤井一二 1973 「法華寺の造営と寺領」『ヒストリア』第63号 大阪歴史学会
- 森 郁夫 1974 「平城宮系軒瓦と国分寺造営」『古代研究』第3号 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室
- 長島勝正 1976 「国分寺と国分尼寺」『富山県史』通史編I - 原始・古代 富山県
- 古岡英明 1983 「伏木地内の古代瓦出土地と、その歴史的背景 - 御亭角遺跡を中心にして - 」『富山県小杉町大門町小杉流通業務団地内遺跡群 - 第5次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 西井龍義 1983 「御亭角遺跡出土の瓦について」『富山県小杉町大門町小杉流通業務団地内遺跡群 - 第5次緊急発掘調査概要』(前掲書)
- 古岡英明 1985 「越中仏教の創始期について - 御亭角廃寺を中心に - 」『富山史壇』第86・87合併号 越中史壇会
- 吉岡康暢 1987 「北陸道の古代寺院」『北陸の古代寺院 - その源流と古瓦』(北陸古瓦研究会編) 桂書房
- 古岡英明 1987 「越中国分寺の造営とその時代背景」『北陸の古代寺院 - その源流と古瓦』(前掲書)

調査参加者名簿

発掘 越前秀雄、岡島敏雄、工幸子、島田英子、高田えみ子、船木悦子、松井弘子、水外一郎、

宮下真知子、吉久恵子

整理 上田順子、高田えみ子、船木悦子、宮下真知子

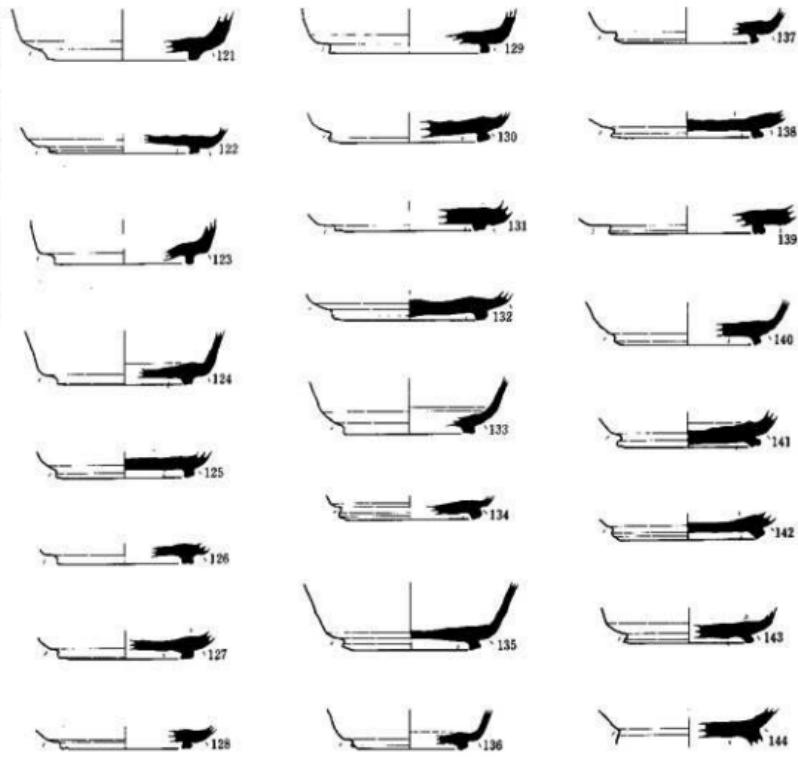


0 5 10cm

図二

遺物実測図

向一次地区



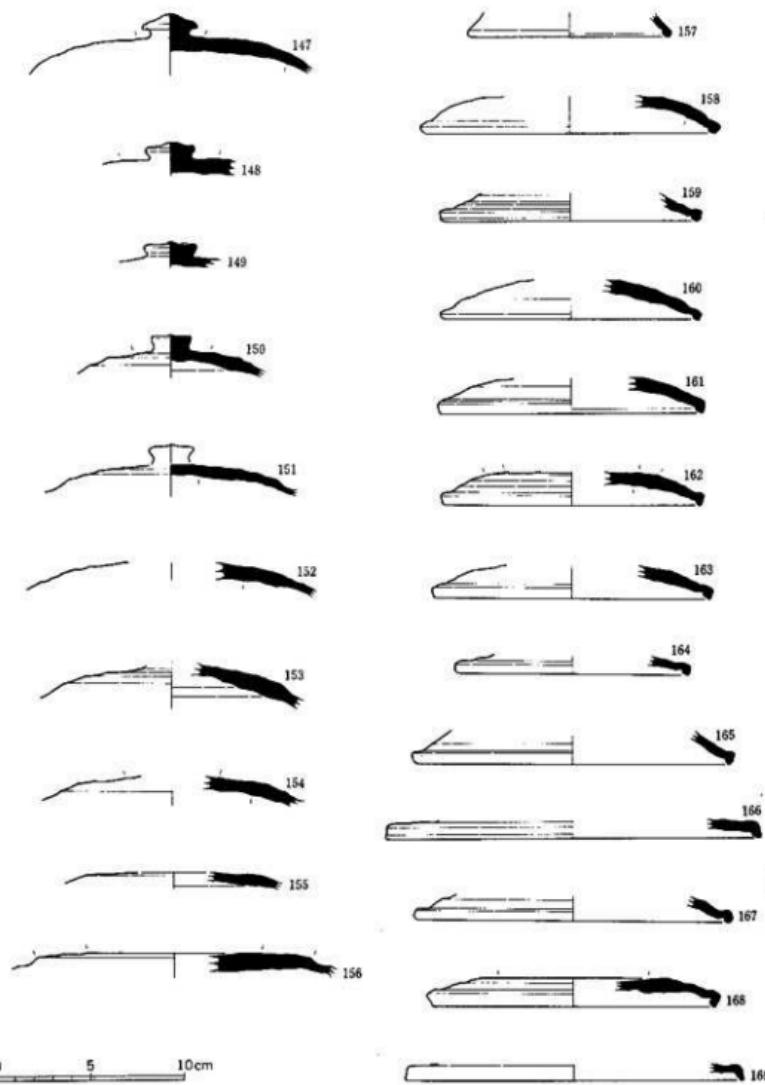
145



146

0 5 10cm

図面三 遺物実測図 向一次地区



須恵器

縮尺1/3

図面四 遺物実測図 向一次地区



170



174



175



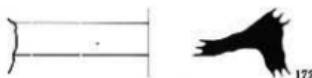
176



171



178



172



177



0

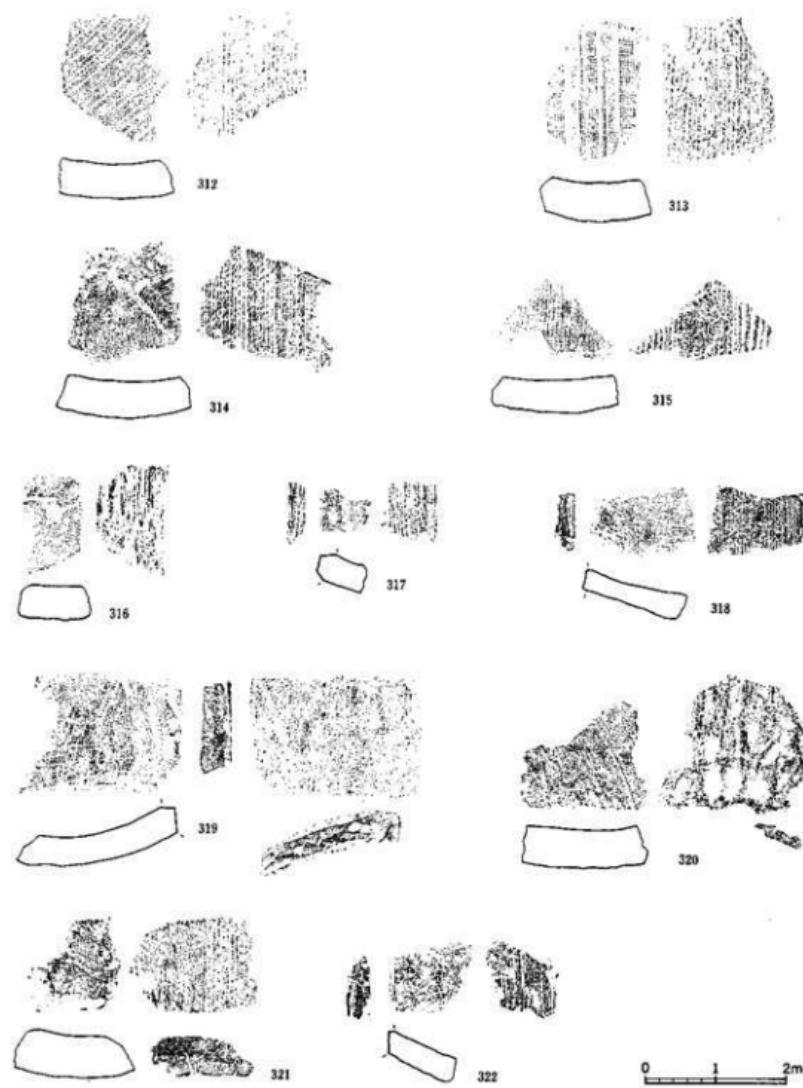
5

10cm

須恵器：170～176、灰釉陶器：177.178

縮尺1/3

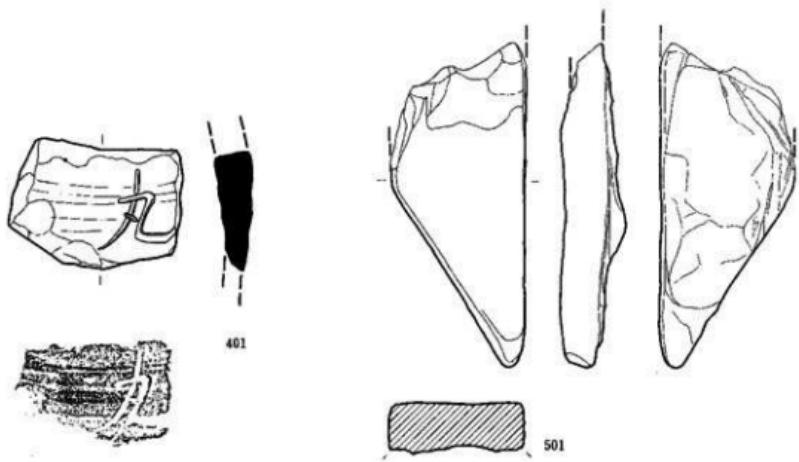
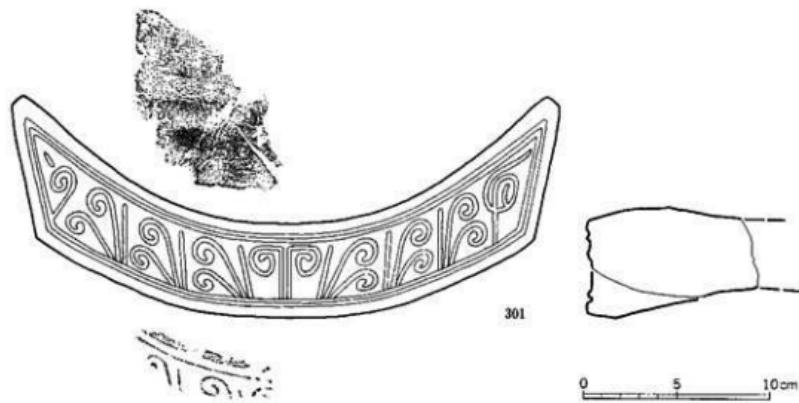
図面五 遺物実測図 向一次地区



平瓦

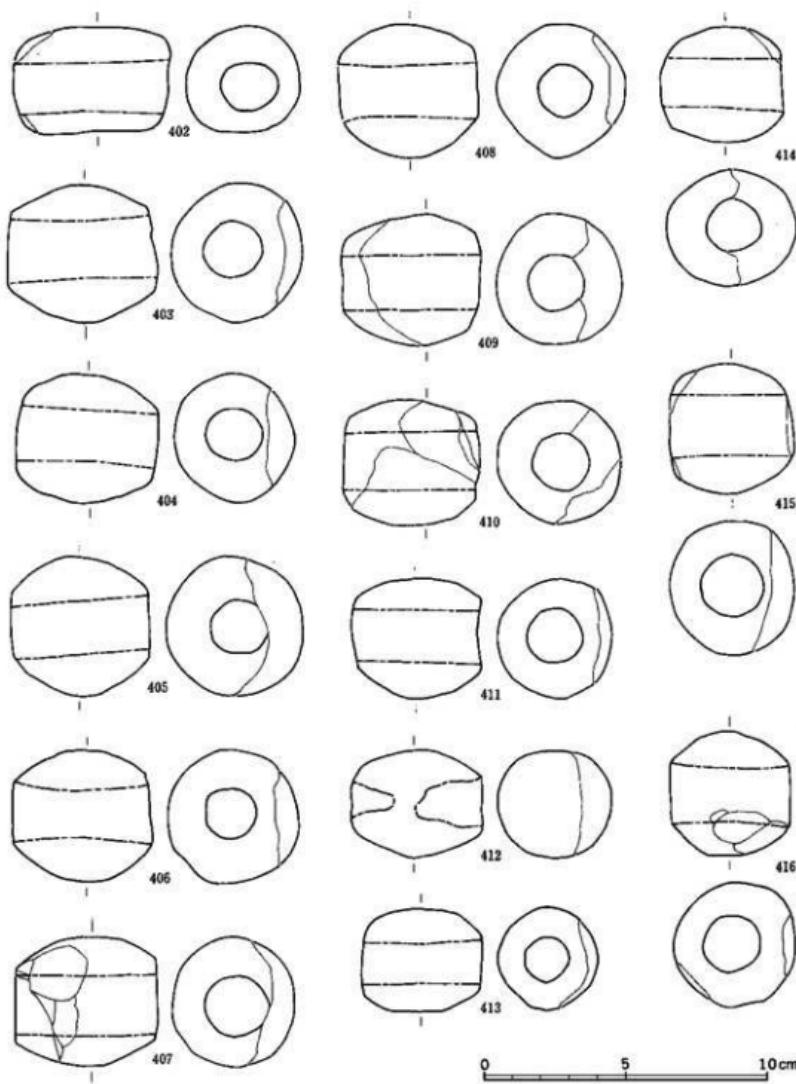
縮尺1/4

図面六
遺物実測図
向一次地区



軒平瓦：301(縮尺1/3), ヘラ撒き土器：401(縮尺2/3), 破石：501(縮尺1/2)

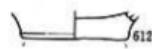
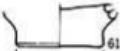
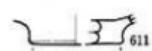
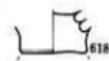
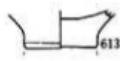
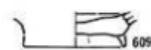
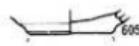
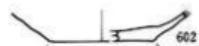
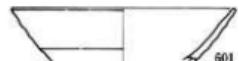
圖面七 遺物実測図 向一次地区



圖面八

遺物実測図

立野二朗地区

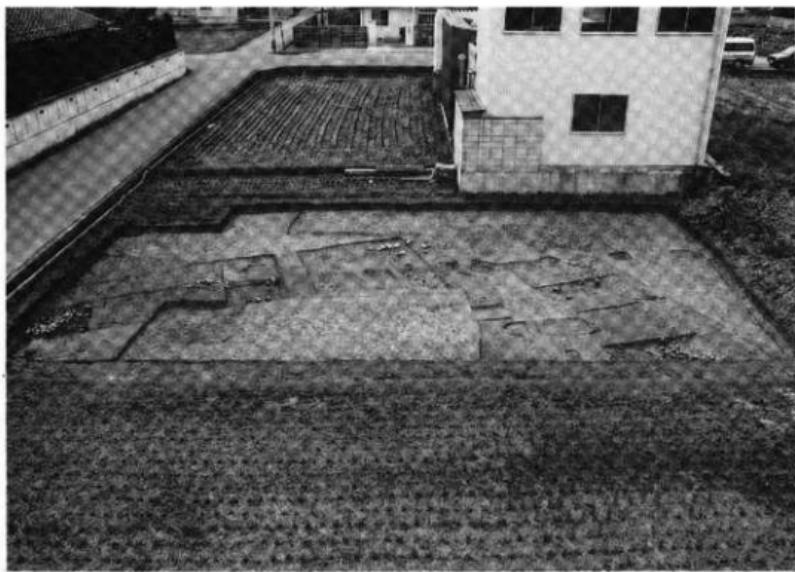


土師器；601～620、須恵器；621・622、珠洲；623

縮尺1/3

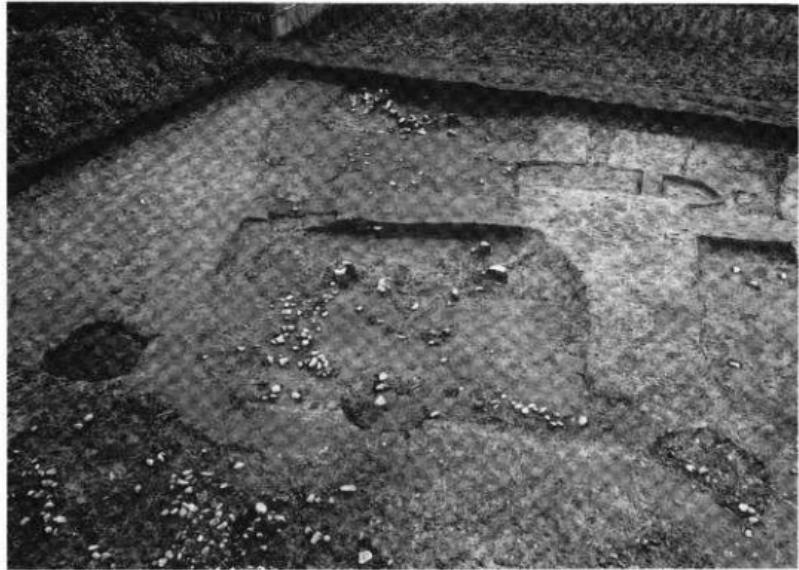


1. 全景（北）

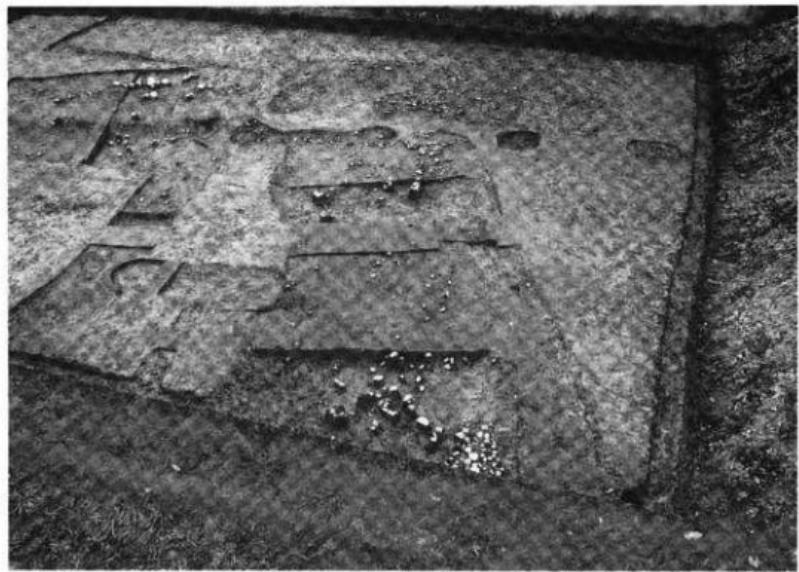


2. 全景（東）

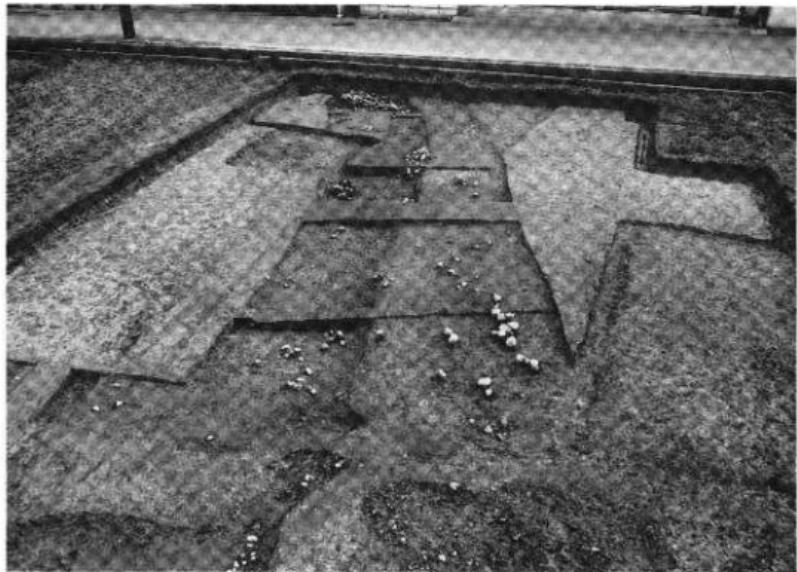
圖版二
遺構 向一次地區



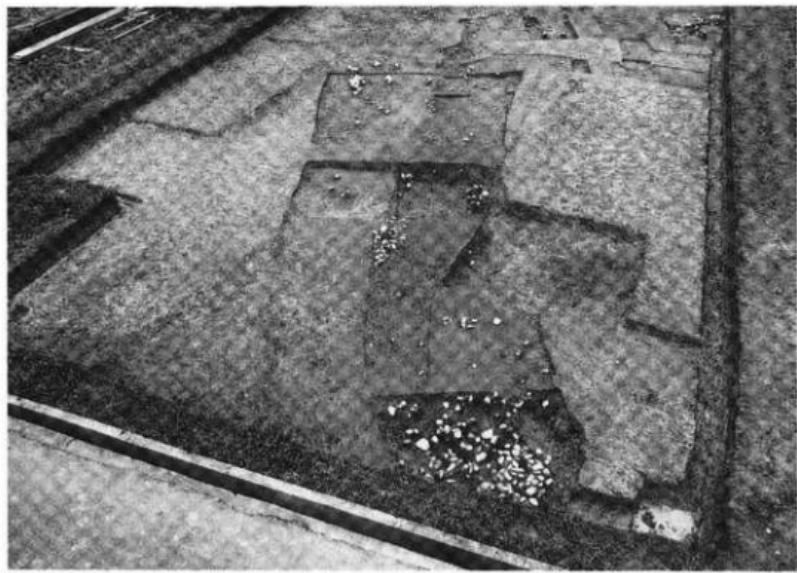
1. SD01・02全景（東）



2. SD01・02全景（西）



1. S D05~07全景(北)



2. S D05~07全景(南)

圖版四
遺構
坂口幸夫地区



1. 全景（東）



2. 全景（西）



1. 全景（南東）

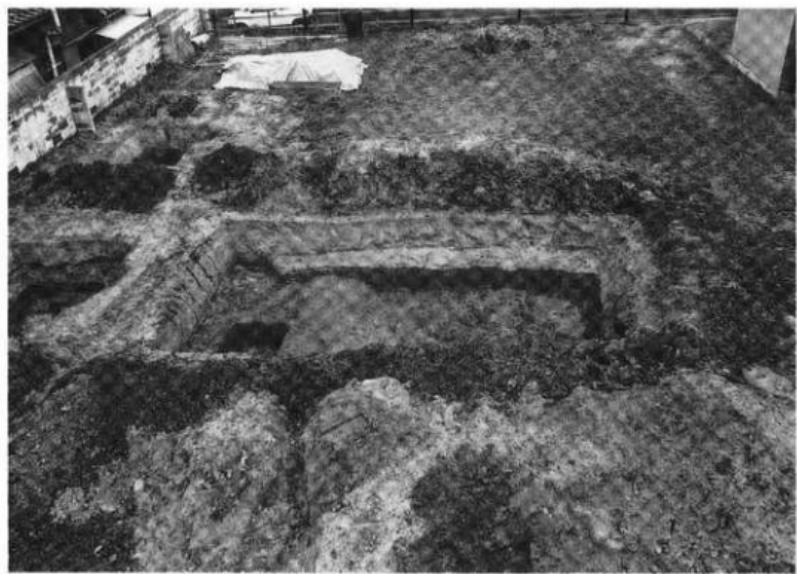


2. 全景（北東）

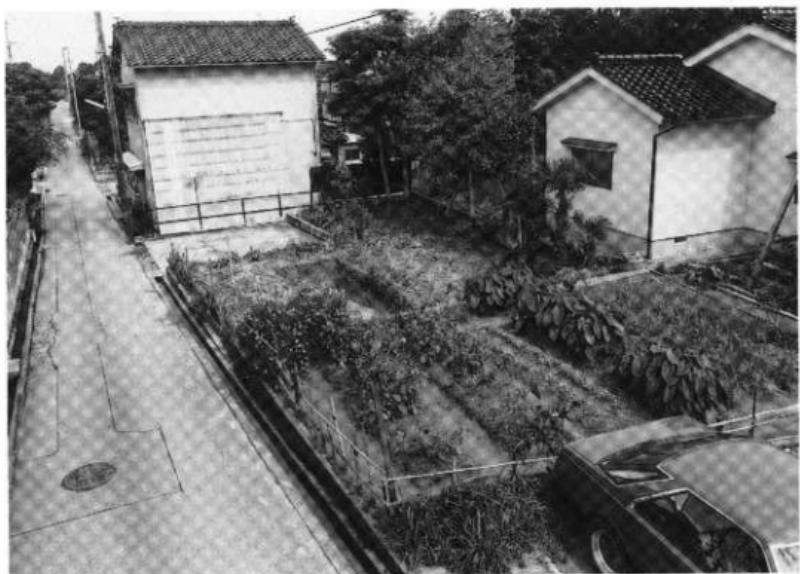
圖版六
遺構
立野二朗地区



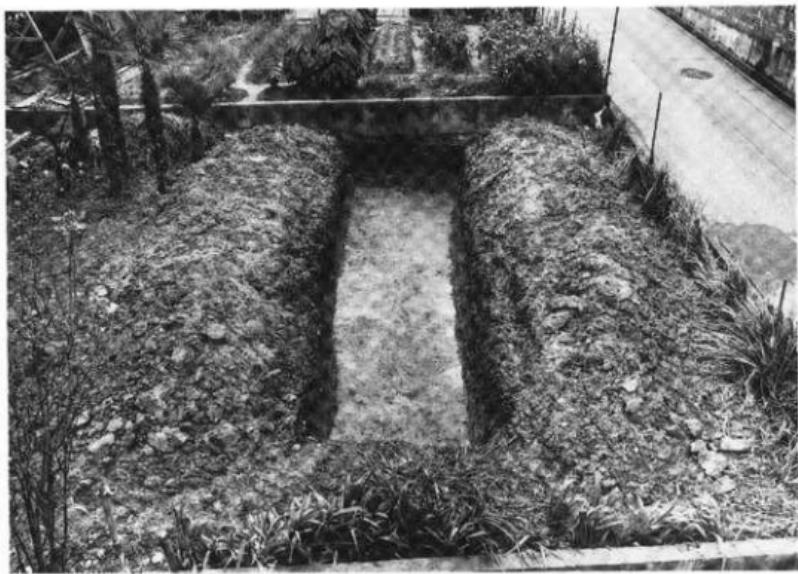
1. 全景（南）



2. 南側近景（北）

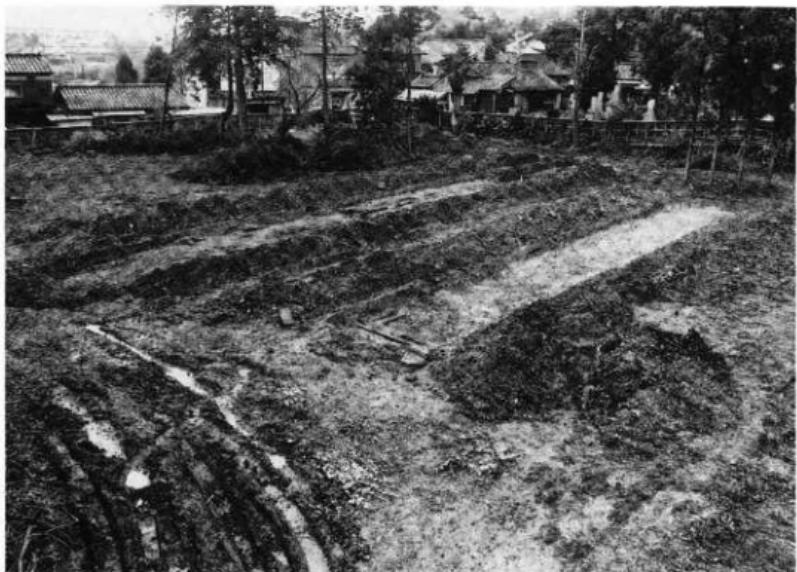


1. 全景（南）

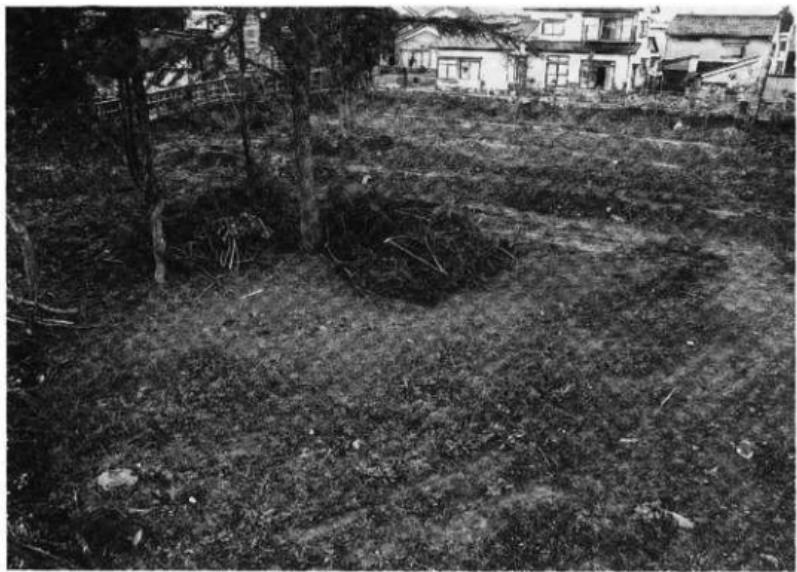


2. 全景（北）

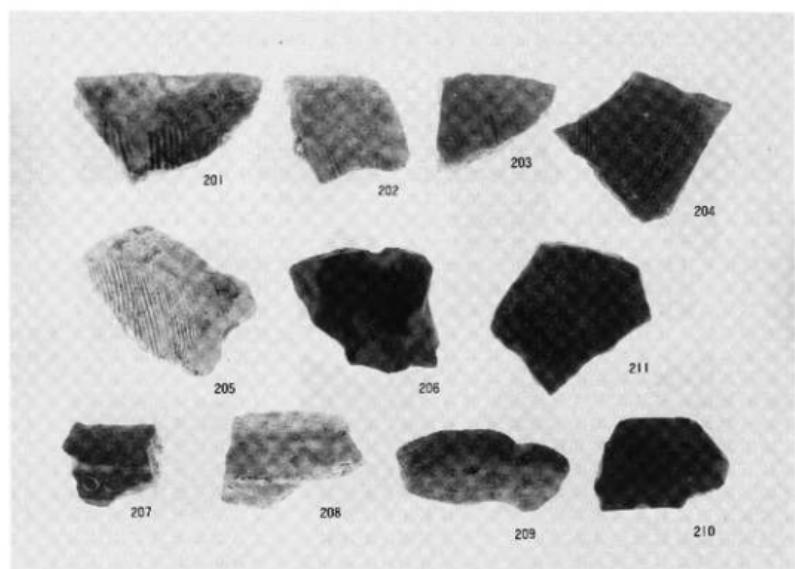
圖版八
遺構
海員會館地區



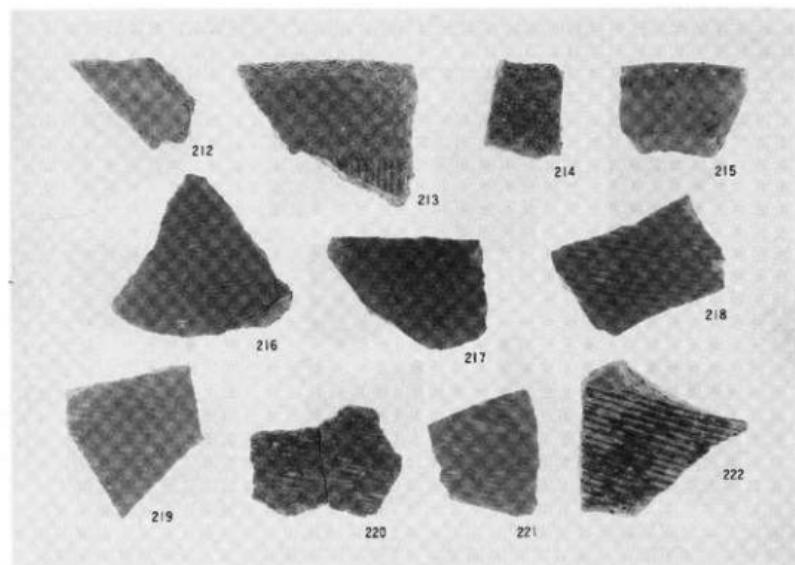
1. 南西側近景（北東）



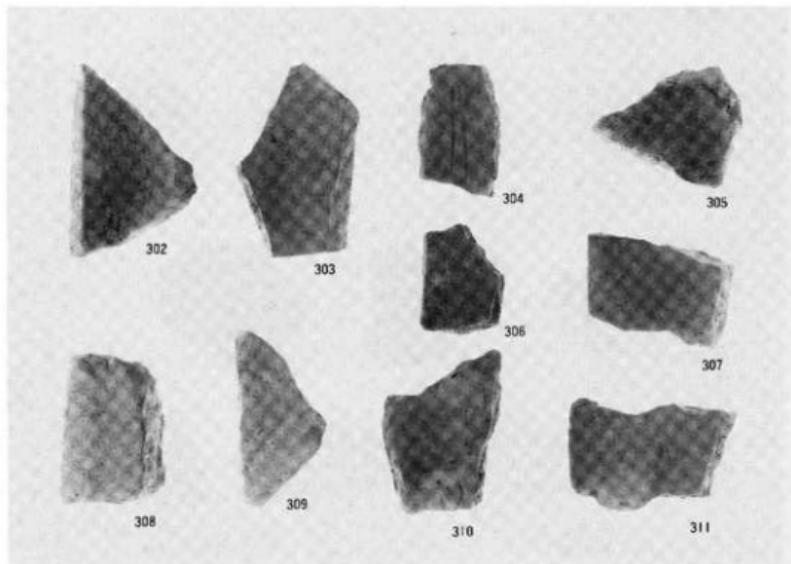
2. 北西側近景（南東）



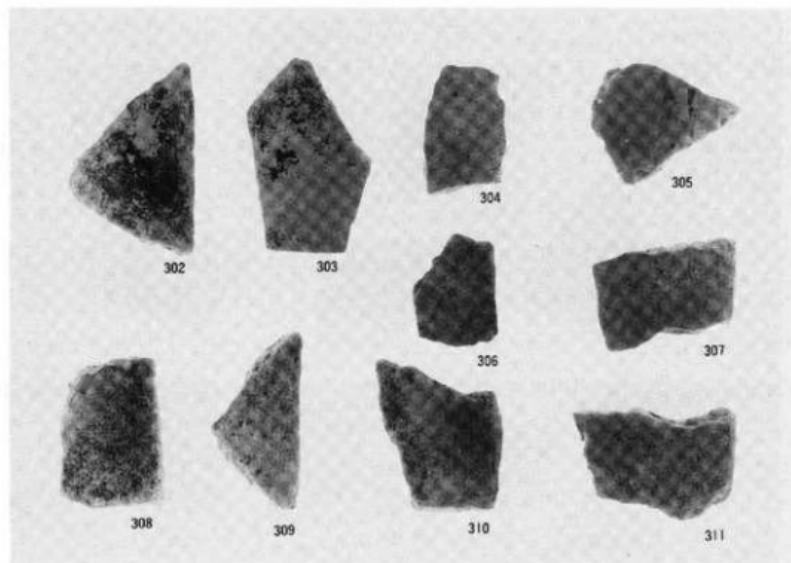
1. 中世土器



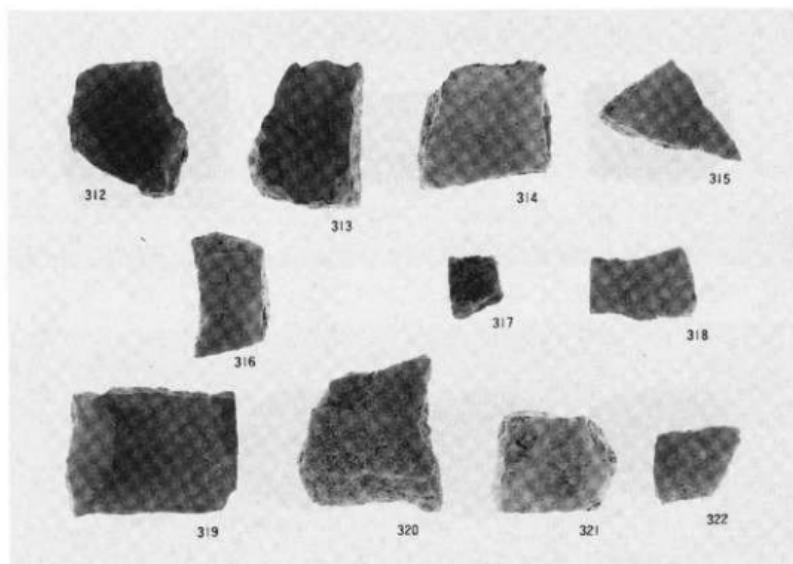
2. 珠洲



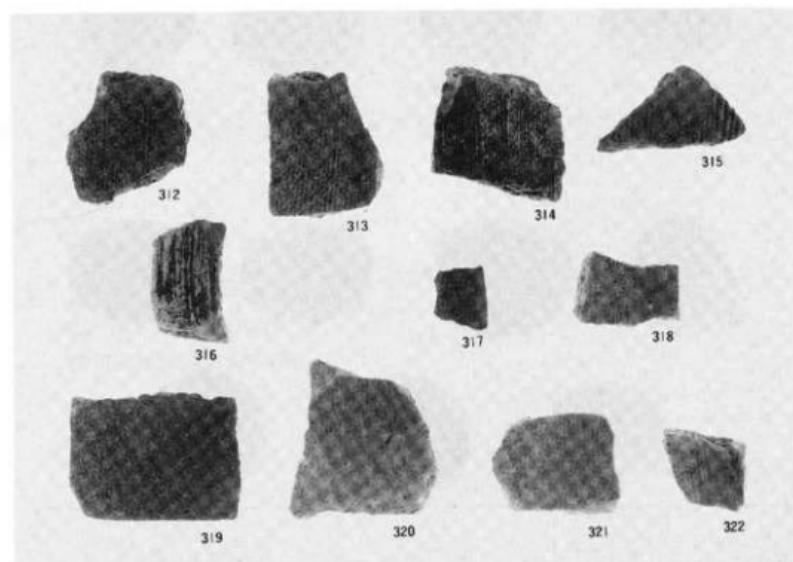
1. 九瓦·平瓦, 凹面



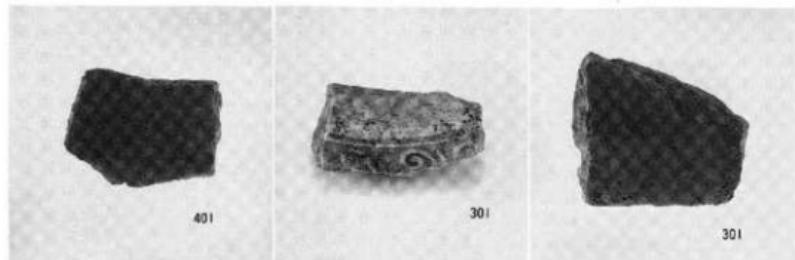
2. 九瓦·平瓦, 凸面



1. 平瓦，凹面

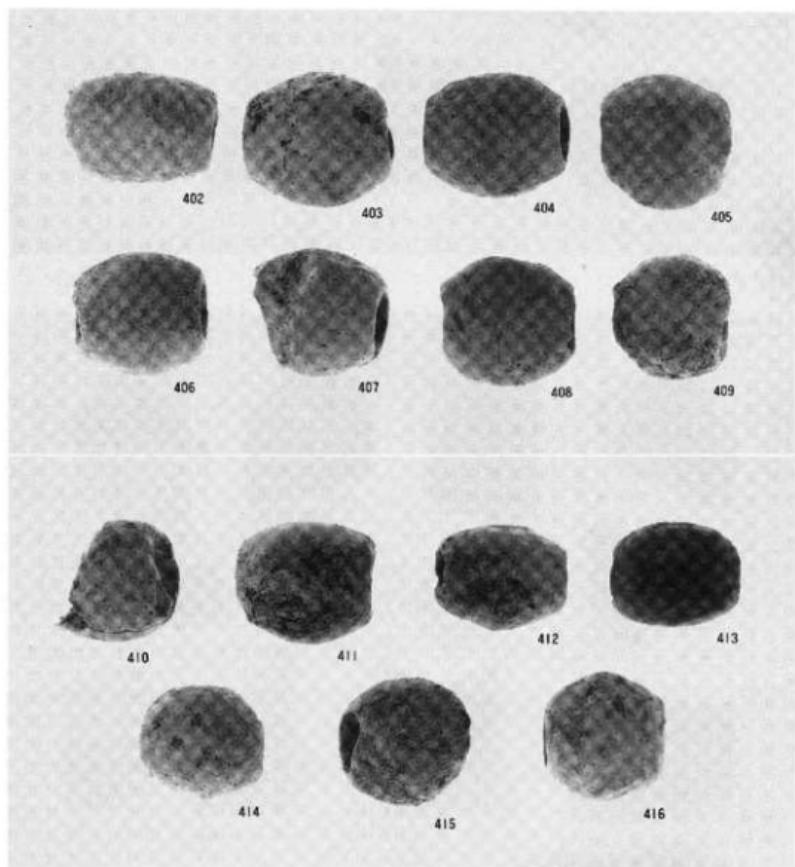


2. 平瓦，凸面



1. ヘラ描き土器

2. 軒平瓦



3. 土鍤

高岡市埋蔵文化財調査概報第11冊
越中國府関連遺跡調査概報Ⅳ

1990年3月31日

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路87-50
印刷所 小間印刷株式会社
富山県高岡市利屋町3

